



東北の素牛生産の基盤に

JGAP認証を取得し管理体制を強化

岩手県にある藤沢牧場では、素牛生産において好成績を残しており、母牛と子牛にとってストレスのない環境づくりを行っている。今回は同牧場における繁殖管理、子牛・育成管理、衛生管理の3つの面から具体的なポイントを紹介する。



《農場データ》
所在地：岩手県一関市藤沢町
飼養頭数：5,151頭
従業員数：41名（2019年3月31日現在）



写真4



写真3

子牛・育成管理のポイント

同牧場は基本的に生後約2カ月半の間、母牛と子牛が一緒の場所で生活する「自然哺育」のスタイルで管理をしている。人が毎日代用乳を与える「人工哺育」とは対照的に、母牛から直に母乳を飲むため、管理の手間が最小限となる。

子牛が過ごしやすいよう牛房にも工夫がされており、生後2週齢までの牛房は子牛が母牛に踏まれないよう子牛用のスペースが確保されている（写真1）。2週齢〜約3カ月齢は同時期に生まれた子牛とその母牛が群飼いになるが、牛房内に子牛のみが移動できるスペースを確保している（写真2）。このようにして、子牛は母牛に邪魔される事なく寝起きができ、好きな時間に母乳を飲む事ができる。また、人工乳を母牛に盗食されずに十分な量を摂る事もできる。

子牛が生後2カ月半になると離乳を迎え、母牛は別の繁殖牛舎に移される。一方で子牛は離乳後のストレスを軽減する事を目的に、母牛の移動後も同一牛房で管理される。人工乳から育成飼料への切り替えも同牛舎で行い、3カ月齢になると育成舎へ移し12頭ほどで管理する。

育成期の管理のポイントは粗飼料を食い込ませる事で、同牧場は粗飼料を飽食させている。牛が1回で食べられる量を与え、飼槽の餌が少なくなるとまた与えるようにしている。常に新しい飼料を与える事によって摂取量を高めている（写真3）。



写真2

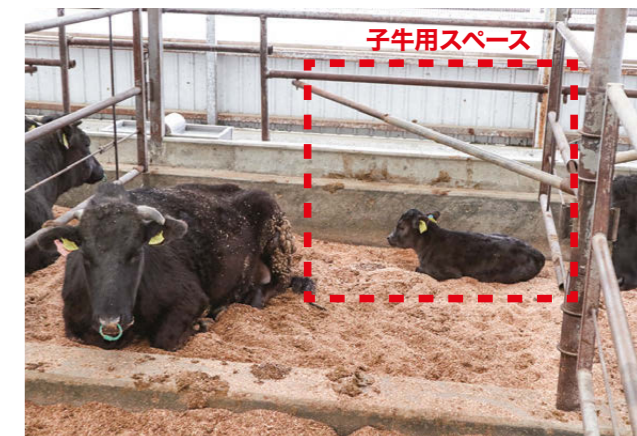


写真1

素牛の安定生産のために

岩手県一関市にある和牛繁殖を行っている藤沢牧場は、2014年よりJGA全農北日本くみあい飼料（株）が運営を始めた。飼養頭数は、繁殖牛3004頭、子牛・育成牛1529頭、肥育牛614頭、種雄牛4頭の合計5151頭である。8〜9カ月齢まで育った育成牛は、東北6県の肥育委託農場にて肥育された後、「東北和牛」のブランド名で、百貨店や量販店などで販売されている。2019年3月末にJGAP認証を取得したことで、さらに生産工程管理を強化し、認証農場の見本となるよう取り組んでいる。

繁殖管理のポイント

繁殖牛は通常複数頭で群飼いをしているが、分娩予定日の2カ月前から独房にて1頭ずつ管理される。この時期は胎児が急激に成長するため、母牛の管理に注意する必要がある。1頭ずつで管理する事により、牛ごとに餌の給与量を調整する事ができる。これにより、太りすぎ、栄養不足を防いでいる。分娩後2週間は子牛とともに同じ牛房で管理され、以降は5〜6組の親子で群飼いになる。分娩後30日後で初回発情が起きると、子宮の状態を確認して種付けを実施している。発情兆候が見られない牛、微弱な牛についてはホルモン治療を行い、分娩後60日前後には初回種付けを行う。こうした管理によって分娩間隔377日の好成績につながっている（全国平均分娩間隔は420日）。

衛生管理のポイント

分娩後の3カ月間を過ごす牛舎は基本的にAI・AO※を行う。牛の移動後は牛舎の洗浄・乾燥・消毒を約3週間実施。また、飼養中も牛舎内で毎日消毒液を散布し牛舎・牛体を消毒する事で、風邪や皮膚病を予防している（写真4）。なお、群管理する哺乳期の疾病発生時には、母牛と子牛を隔離する牛房を同牛舎内に設置。加えて、24時間体制の管理により、病気の早期発見・蔓延を防止している。

※オールイン・オールアウト



藤沢牧場の皆さん